

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
1 資料収集・保管活動	資料の計画的な収集・整理・保管ができていますか	自然史系資料収集	資料収集方針に基づいた収集・保存ができていますか	資料収集方針に基づいた収集が行えた	資料収集方針に基づいた収集が行えた	B	計画中の特別展に向けた資料の購入や委託作成ができたほか、寄贈依頼にも積極的に応え、タイプ標本など学術的に貴重な資料の寄贈を受けることができた。また、分野毎の具体的な中期的収集計画を策定した。	A	* 自然史系資料収集は、学術的な価値が高いホロタイプとパラタイプ標本に加えて、北九州市や北部九州産を中心とした多数の化石標本や甲虫標本の寄贈を受けたことからAと評価した。今後も継続して欲しい。
		自然史系資料登録	登録点数(デジタルデータベース化点数)	1,638点	258点	B	新たなデータベース化手法が確立し、前年度以上の点数が登録できたが、未登録点数を考えると十分とは言えない。そのため、資料所有数を精査するとともに、次年度の定量的な登録目標を設定した。	B	* 自然史系資料登録は、データベース化手法が確立し、計画的な収集や効果的な活用の進展が期待できる。質量ともに豊富な資料を市民にリアルタイムで示し、来館の積極的な動機付けにつなげることができる。 * 歴史系資料収集も、所定の方針に基づいて、計画的な収集・整理・管理が進められている。
		歴史系資料収集	資料収集方針に基づいた収集・保存ができていますか	資料収集方針に基づいた収集が行えた	資料収集方針に基づいた収集が行えた	B	これまで寄託されていた小倉祇園のだし5点(県指定)の寄贈を受けることができた。また地域の歴史・文化資料4件を適切に購入することができた。	B	* 歴史系資料登録は、点数が少なかったことでCと評価した。大規模資料群の整理作業が現在進行中であるので、次年度に期待したい。
		歴史系資料登録	登録点数(受入手続終了点数)	35点	415点	D	登録点数は減少したが、約4,000点を超える銘菓「八幡饅頭」鶴屋の関係資料など大規模資料群の整理作業を進めており、単年度では完了に至らなかったが、令和3年度の登録点数は増加する見込みである。また収蔵する資料群台帳の作成を進め、資料管理の充実を図った。	C	* 総合的には、自然史系・歴史系ともに収集方針に従って資料収集しており、歴史系資料登録についても大規模資料群の登録作業が進められていることから、全体として資料収集・保管活動は概ね良いと評価できるため、Bと評価した。
	<総合>					C	収集方針に基づいて貴重な標本・資料を収集することができた。登録についても自然史課では新たなデータベース化手法を構築し、歴史課では資料群台帳の作成を進めるなど資料管理の充実を図った。自然史課は登録点数が増加し、歴史課は減少したが、大規模資料群の整理作業を進めていて、令和3年度は登録点数が増える見込みである。	B	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
2 調査研究活動	戦略的な調査研究を実施し、博物館の調査研究機能を高めることができるか	研究業績	外部資金応募数・採択数 *令和2年度申請・採否決定分 (採否未定分については申請数からも除外)	23件申請 5件採択	28件申請 8件採択	B	前年度が採択率28.6%だったのに対し、当該年度は21.7%と減少したが、20件以上申請して2割以上採択されているのは研究機関として採択率が高い。	B	* コロナ禍にあっても、学術研究機関としての外部資金獲得により、それぞれの専門分野で学芸員が着実かつ意欲的に調査研究を継続している。 * 特に外部資金獲得による継続実施研究課題数は、前年よりも増えていたのでAと評価した。
			外部資金獲得による継続実施研究課題数 *令和2年度開始分を含む	20件	17件	B	科研費は16件(自然史課は代表6件・分担5件、歴史課は代表4件・分担1件、合わせて代表10件・分担6件)、その他は4件(いずれも代表で、自然史3件、歴史1件)。	A	* 自然史系の論文は、博物館学に貢献するような論文から地域の自然史に関する調査研究報告に加え、査読付の国際誌に発表された多数の論文を含んでいた。国際共著論文が全論文の3割程度を占めていたことから、国際的な共同研究も活発に行われていたと推察される。このような質の高い研究活動が日本哺乳類学会論文賞の受賞にもつながったと思われるので、Aと評価した。
			自然史系 学術論文等出版数 学会発表数	出版41本 発表19件	出版33本 発表32件	B	査読付の国際誌から地域の自然史に係る調査研究報告まで幅広く、研究成果を公表できた。学会発表は減少したが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う学会の中止が相次いだことにより止むを得ない面がある。	A	* 歴史系については、『小倉城と城下町』と『名刀「博多藤四郎」の輝き』の2冊を刊行しており、学術研究機関としての調査研究を継続している結果と思われるので、Bと評価してよい。 * 普及書等の執筆数が昨年比べて倍増し、研究成果の社会への知的還元にも貢献したことは高く評価できるので、Aと評価した。
			歴史系 学術論文等出版数 学会発表数	出版 7本 発表 1件	出版7本 発表5件	C	博物館編として『小倉城と城下町』と『名刀「博多藤四郎」の輝き』の2冊を刊行した。前者では関係する学芸員が分担し、小倉城に関する調査研究の成果を集成することができた。後者では北九州所縁の文化財刀剣を軸に、歴史と美術の両分野を総合して、江戸時代前期の地域の歴史について新たな視点を示すことができた。ただし査読ありの学術論文の発表がなく、学会発表も1件に留まったことについては改善すべき課題である。	B	* 総合的には、科学研究費など外部資金を意欲的に獲得し、高い質の論文を多数出版したこと、また多数の普及書等の執筆という形で、研究成果の社会還元を行ったのでAと評価した。
	普及書等執筆数	21本	10本	A	普及課2本、自然史課(図鑑など)5本、歴史課11本(東アジア友好博物館巡回展図録寄稿など)を執筆した。	A			
	<総合>					B	研究機関として、科研費などの採択を受けながら、各学芸員が研究に意欲的に取り組み、各分野で研究成果を発表することができた。	A	

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120～80%、C: 80～40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
3 展示活動	自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるとともに質の高い魅力ある展示ができているか	総入館者数	総入館者数	137,736人	452,863人	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館や入館者の人数制限などの影響が大きいことから、評価対象外とした。	—	*コロナ禍の中で総入館者数や特別展観覧者数は評価できない(評価対象外とする)が、対策を講じて、可能な範囲で受け入れたことは評価できる。	
		特別展	特別展総観覧者数	特別展観覧者数(合計22,000人、冬12,000人、春10,000人)	24,421人	198,482人	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館や緊急事態宣言の発令、入館者の人数制限などの影響が大きいことから、評価対象外とした。	—	*冬の特別展については、コロナ禍による影響で観覧者数が当初の見込みより少なかったことは止むをえない。他施設とも協力して、展示方法や照明を工夫し、展示解説の多言語化を実施するなど意欲的に取り組んだことが、アンケート結果にもみられるように、観覧者の満足度を高めることにつながったことから、Aと評価した。
			冬特別展 名刀「博多藤四郎」の輝き	国重文の刀剣を軸に、ポスト戦国期の藩の確立と武士・武具の行方を明示文化庁の助成事業大人600円など総観覧者は6,718人(目標は12,000人)			B	緊急事態宣言発令の影響を受けて、入館者数は当初目標を大きく下回った。文化庁助成の主眼であるインバウンドの来館はなかった。しかし初めて国指定文化財の刀剣を展示。展示方法や照明を工夫。特別展として初めて展示解説の多言語化を実施。他施設との協力体制を構築し、従来の武器や武将をテーマとする展覧会とは異なる視点で、地域の歴史と日本の文化、歴史と美術を総合的に明示するなど、従来にない特別展となった。アンケート等でも概ね好評を得た。	A	*春の特別展については、コロナ禍の中でも安心して観覧できる展示手法を考案・実施したこと、また博物館の重要な任務を前面に示して、市民の関心を高めたこと、コロナ禍の中でも入館者数が見込みよりかなり多かったことから、Aと評価した。収蔵庫シリーズは第2弾・第3弾を期待したい。
			春特別展 わたしたち『収蔵庫』に居るんです	総観覧者は17,503人(目標は10,000人)大人300円など			A	コロナ禍でも安心して観覧いただくための展示手法を考案し実施した。アンケート調査の結果(有効回答数311件)から、援用した展示手法および総合的な満足度は概ね好評であり、展示内容の理解度も高かったものと考えられた。	A	*企画展等においても、博物館の収蔵資料をとおり地域の歴史や文化を掘り起こし、市民のシビックプライド醸成にもつながる展示を行った。特に「福田屋と小倉銘菓『鶴の子』」は、北九州ゆかりの老舗や文化人とのつながりを改めて知る有効な機会となった。また、最新の研究成果を速やかに紹介したことは高く評価できるので、Aと評価した。
		企画展	歴史企画展 福田屋と小倉銘菓「鶴の子」	江戸時代以来の小倉の菓子商の歴史と文化人との交流を紹介				昨年度新たに寄贈された資料を含めて、関係資料を精選して紹介し、地域の歴史や文化の一面を明示することができた。大正時代の日常風景の写真についてはボランティアによるデジタル化と調査研究の成果報告を兼ねている。		
			歴史企画展 権様	庶民生活史研究家堀切辰一氏のコレクションと研究成果を紹介				古い布や着物のコレクションを精選し、当館歴史系の代表的コレクションの成り立ちと意義を明らかにし、今後の可能性を示すことができた。		
			歴史企画展 わくわくタイムトラベルいまむかし	小学3年社会科の学習支援として、道具や暮らしの移り変わりを紹介				今回は衣食住の3テーマで展示を構成し、社会科の学習支援につなげた。新型コロナウイルス感染症拡大によりハンズオン展示は取り止めたが、新たに「展示ガイド」を作成し、展示内容の理解促進に努めた。	A	
			歴史企画展 テーマ展 近現代史関連	世界遺産を中心に、北九州の近現代史に関する様々な展示を行った				世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」巡回展3、山本作兵衛コレクションの「世界の記憶」登録10周年記念交流キャラバン展、世界文化遺産の八幡製鐵所関連施設ビジターセンターをKIGSから移設(1年間の予定)、鹿藩置県150年記念のテーマ展など関連したテーマで時宜に合った企画展を行うことができた。特に山本作兵衛の炭坑記録画の原画(「世界の記憶」登録)10点と当館の最大の炭坑記録画を同時に公開できた。		
			自然史 ほけつとM展示 替え「古いカタチを残す生き物たち」	化石種と似た特徴を持つ両生類と爬虫類を紹介				巨大なワニガメの生体展示を加えたことで、当該コーナーの観覧者数や観覧時間が増加したようである。従って、この生体展示は、当該コーナーの展示意図(メッセージ)を効果的に伝えることに寄与していると考えられる。		
			その他展示 (短期展示など)	新種の化石展示やクリスマス・干支展示などを行った				新種の魚類化石(イキムカシケツギヨ)や鳥類化石(プロトテルム科)を展示するなど、最新の研究成果を紹介できた。	A	
	<総合>					新型コロナウイルス感染症拡大により総入館者数や特別展観覧者数は大幅に減少したが、そのなかで安全安心な展示観覧環境を整備するとともに、内容・方法ともに意欲的な特別展・企画展を実施することができた。	A			

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
4 教育普及活動	博物館がセカンドスクールとして、子どもたちの来館機会を創出し、理科・社会科への学習意欲を持たせる仕組みづくりを進めているか	セカンドスクール事業(MT主務)	学校団体誘致活動回数(100社)	96社	167社	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な制約が大きいため評価対象外とした。	—	* 新型コロナウイルス感染症拡大の影響を直接受けており、評価対象外とする。
			社会見学・修学旅行等 入館団体数 入館者数	312団体 14,108人	947団体 62,479人	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な制約が大きいため評価対象外とした。	—	
			体験プログラム等 実施回数 参加者数	78回 3,305人	130回 6,275人	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な制約が大きいため評価対象外とした。	—	
			ミュージアムツアー 入館団体数 入館者数	9団体 459人	29団体 1,162人	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な制約が大きいため評価対象外とした。	—	
	市民の知的ニーズに応じた効果的な生涯学習が実施できているか	教育普及講座類(学芸員主務)	館主催普及講座 開講数 参加者数	11講座 122人	39講座 1,202人	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な制約が大きいため評価対象外とした。	—	
			特別展関連普及講座等 実施回数 参加者数	3回 176人	58回 14,850人	—	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な制約が大きいため評価対象外とした。	—	
<総合>						—	新型コロナウイルス感染症拡大により、特に教育普及活動には大きな制約があったため、総合的にも評価対象外とした。	—	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
5 広報・情報発信活動	多様な広報媒体を活用し、特別展をはじめ博物館活動の情報発信に努めているか	特別展等博物館活動 広報・報道件数	広報・報道(市政記者クラブ)に情報提供した件数	17件	23件	B	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館や春・夏・秋の特別展が中止となるなかで、積極的な情報提供に努め、減少を最小限にとどめた。	B	* 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で臨時休館や特別展の中止が余儀なくされる中でも、積極的な広報活動を工夫継続しており、その成果が報道等で取り上げられる件数の減少を最小限に留めることにつながっていることがうかがえる。またSNSの活用など、新たな広報活動の取り組みを続けているため、これらの項目についてはBと評価した。
			広報・報道で取り上げられた件数	・新聞 延べ12誌 253件 ・雑誌等 延べ19誌 30件 ・テレビ 延べ11社 118件 ・ラジオ 延べ4社 111件 ・インターネット 延べ20社 21件	・新聞 延べ21誌 300件 ・雑誌等 延べ42誌 66件 ・テレビ 延べ18社 223件 ・ラジオ 延べ13社 59件 ・インターネット 延べ36社 42件	B	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館や春・夏・秋の特別展が中止となるなかで、積極的な情報提供に努め、減少を最小限にとどめた。	B	* ホームページアクセス数は、特に閉館中も含めYouTubeによる各種配信など意図的に取り組んだことが評価できるため、Aとした。 * 総合的には、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下でも様々な工夫をして、広報活動を実施しており、Bと評価した。
			ホームページアクセス数	397,155件	508,759件	B	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館や春・夏・秋の特別展が中止となった。しかし「おうちでのちのたび博物館」を新設し、学芸員の展示解説動画をYouTubeで配信、塗り絵を公開するなど新しい取り組みを実施した。また特別展についても、冬の特別展でギャラリートーク映像を4ヶ国語で公開した。そのため件数も2割強の減少に留めることができた。	A	
			SNS(Twitter、Facebook)での情報発信数	385件	412件	B	新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館や春・夏・秋の特別展が中止となるなかで、クイズ「博物館からの挑戦状」をTwitterやFacebookで配信するなど積極的な情報発信に努め、減少を最小限にとどめた。	B	
	<総合>					B	新型コロナウイルス感染症拡大のなかで、春・夏・秋の特別展が開催できないなかで、前年度比8割近い実績があった。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	
6 市民との協働	博物館ボランティア(シーダー)の参画により市民との協働による取り組みが進められているか	博物館ボランティア(シーダー)の活動	シーダー登録者数(50人)	53人	58人	B	前年度より若干減少したが、目標値を上回っている	B	*認定不能や評価対象外とならなかった評価指標も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた。そのような状況下で、今後に向けて活動の再検討を行い、アフターコロナにつながる準備の年とすることができたので、各評価指標についても、総合的にもBと評価した。	
			活動再開に向けた計画策定状況等	説明会を実施			B	新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、ほとんど活動ができなかった。そのなかで説明会や養成講座を実施し、次年度に備えた。		B
	友の会の活動を支援するなど、友の会と連携できているか	「自然史友の会」の活動	活動再開に向けた計画策定状況等	友の会役員とコロナ禍での活動に係る協議を実施			B	活動自体はほとんど実施することができなかった。一方、友の会役員と、活動自粛の理由や意義などを明示し会員に伝えるための協議を頻繁に実施した。		B
			冊子類発行数	2冊	5冊	—	年間4冊発行を目標としたが、新型コロナウイルス感染症拡大により活動が実施できず、記事が集まらなかったことによるため、評価対象外とした。	—		
		講演会 実施回数 参加者数	7回 304人	10回 1,250人	—	博物館の臨時休館に伴い、前半5回の講演会を中止または延期した。その後は会員限定、定員上限80名で、新型コロナウイルス感染症拡大防止策を講じて実施した。実施回数や参加者数については評価対象外とした。	—			
	「歴史友の会」の活動	史跡めぐり 実施回数 参加者数	1回 26人	4回 139人	—	4回予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大によって、3回は中止となったため、評価対象外とした。	—			
		歴史友の会だよりの発行回数	3回	3回	B	当初計画のとおり、3回発行した。会長の寄稿、特別展開催に伴う学芸員の論稿、地域の歴史に関する会員の寄稿により、会員相互の情報交換に寄与した。	B			
<総合>						B	コロナ禍によって活動が制限されることが大きく、評価対象外とした項目もあるが、可能な限りで活動を無事に実施した。また今後に向けた活動の再検討を行い、今後に繋げた。	B		

評価基準 A:大変良い、B:概ね良い、C:やや不十分、D:不十分

定量的な指標に関しては、主にA: ≥120%、B: 120~80%、C: 80~40%、D: ≤40% とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	前年度実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
7 社会貢献	学術研究機関として社会に貢献し、シンクタンク機能を果たすことができているか	学術研究機関として、大学等外部機関への支援ができているか	委員等就任 人数 件数	17人 83件	17人 61件	B	自然環境や文化財保護などの委員に就任し、行政機関等への協力を行った。	A	* 委員等就任件数については、前年より36%も増えた。北九州市や福岡県の委員のみならず、環境省や国土交通省、日本学術振興会の委員や、各種学会など学術研究団体の役員なども引き受けて、学芸員の経験や知見の蓄積をもとに、大きな社会貢献をしたので、Aと評価した。
			外部機関の依頼による講演などの対応回数	49件	54件	B	大学や小中高校、NPO団体、職員研修所、生涯学習施設などで、依頼を受けて様々な形で講演などを行った。また小倉城の企画展や旧安川家住宅の整備公開などに協力するなど市の関係機関に協力した(普及課3件、自然史課26件、歴史課20件)。	B	* 外部機関の依頼による講演などの対応回数については、コロナ禍にありながら昨年からはほとんど減っていないことからBと評価した。 * 資料貸出については、件数は昨年より5割以上増えたが、点数は半減している。全体として前年度同等とみなせることからBと評価した。
			資料貸出	資料貸出者(団体)数 貸出点数	85件 397点	55件 827点	B	他機関からの要請に応じ、学術研究や教育普及活動の支援を行った(資料画像データの提供を含む)。	B
	<総合>					B	他機関の依頼に応じて、様々な形で広く社会貢献を行うことができた。	B	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: $\geq 120\%$ 、B: $120\sim 80\%$ 、C: $80\sim 40\%$ 、D: $\leq 40\%$ とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	評価視点	評価小項目	評価指標(括弧内は目標値)	実績	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由
8 その他	適切な新型コロナウイルス感染症対策や新たな取り組みが行えたか	チケット購入までの事項	安全・安心な来館やチケット購入体制が整備されたか	入館時の検温や手指消毒を徹底、時間制ウェブ予約システムを導入	A	文化芸術振興費補助金(文化施設の感染症防止対策事業)の助成を受け、時間制ウェブ予約システムやサーモカメラを導入するとともに、予約人数などを適宜調整して、安全・安心な来館体制を構築できた。	A	* 新型コロナウイルス感染拡大と状況の度々の変化の中で、来館者の安全・安心を確保し、適切な感染防止策をシステム化し、組織的な対応を徹底して講じた結果、市民からも安全・安心な博物館であることが認知されたと考えられるので、すべてAと評価した。
		展示観覧に係る事項	安全・安心な展示鑑賞環境が整備されたか	「三密」防止のための館内での周知	A	状況に応じて、時間ごとの入館者数を決定するなど、時間制ウェブ予約システムを弾力的に運用したうえで、館内でも「三密」防止を周知した。	A	* 今後も安全・安心な来館・観覧環境を工夫・継続していただくとともに、より多くの市民が安心して来館でき、所有する多くの展示資料等の観覧や様々な体験ができる工夫を期待したい。
	<総合>				A	新型コロナウイルス感染症拡大のなかで、ワーキンググループを設置して詳細な検討を行い、安全・安心な来館・観覧環境を整えることができた。	A	

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分

定量的な指標に関しては、主にA: $\geq 120\%$ 、B: $120\sim 80\%$ 、C: $80\sim 40\%$ 、D: $\leq 40\%$ とし、これに定性的な要件を加味して、総合的に判断する。

評価項目	自己評価	自己評価の理由	外部評価	外部評価の理由	意見
1 資料収集・保管活動	C	収集方針に基づいて貴重な標本・資料を収集することができた。登録についても自然史課では新たなデータベース化手法を構築し、歴史課では資料群台帳の作成を進めるなど資料管理の充実を図った。自然史課は登録点数が増加し、歴史課は減少したが、大規模資料群の整理作業を進めていて、令和3年度は登録点数が増える見込みである。	B	<ul style="list-style-type: none"> * 自然史系資料収集は、学術的な価値が高いホロタイプとパラタイプ標本に加えて、北九州市や北部九州産を中心とした多数の化石標本や甲虫標本の寄贈を受けたことが高く評価できる。今後も継続して欲しい。 * 自然史系資料登録は、データベース化手法が確立し、計画的な収集や効果的な活用の進展が期待できる。質量ともに豊富な資料を市民にリアルタイムで示し、来館の積極的な動機付けにつなげることができる。 * 歴史系資料収集も、所定の方針に基づいて、計画的な収集・整理・管理が進められている。 * 歴史系資料登録は、点数が少なかったため低い評価をした。大規模資料群の整理作業が現在進行中であるので、次年度に期待したい。 * 総合的には、自然史系・歴史系ともに収集方針に従って資料収集しており、歴史系資料登録についても大規模資料群の登録作業が進められていることから、全体として資料収集・保管活動は概ね良いと評価できるため、Bと評価した。 	<ul style="list-style-type: none"> * 次年度は登録点数が増えることを期待している。 * 資料収集・保管活動について、新たなデータベース手法の構築や分野別の具体的中期的な収集計画が設定できたことは、今後新たな学芸員に引き継ぐゆぎない基礎となると思う。 * 博物館で収集・保管されている貴重な資料を市民・来館者が体感できる機会が今後もさらに増えると良い。
2 調査研究活動	B	研究機関として、科研費などの採択を受けながら、各学芸員が研究に意欲的に取り組み、各分野で研究成果を発表することができた。	A	<ul style="list-style-type: none"> * コロナ禍にあっても、学術研究機関としての外部資金獲得により、それぞれの専門分野で学芸員が着実かつ意欲的に調査研究を継続している。 * 特に外部資金獲得による継続実施研究課題数は、前年よりも増えていたので、高い評価をした。 * 自然史系の論文は、博物館学に貢献するような論文から地域の自然史に関する調査研究報告に加え、査読付の国際誌に発表された多数の論文を含んでいた。国際共著論文が全論文の3割程度を占めていたことから、国際的な共同研究も活発に行われていたと推察される。このような質の高い研究活動が日本哺乳類学会論文賞の受賞にもつながったと思われる。 * 歴史系については、『小倉城と城下町』と『名刀「博多藤四郎」の輝き』の2冊を刊行しており、学術研究機関としての調査研究を継続している結果と思われる。 * 普及書等の執筆数が昨年比べて倍増し、研究成果の社会への知的還元にも貢献したことは高く評価できる。 * 総合的には、科学研究費など外部資金を意欲的に獲得し、高い質の論文を多数出版したこと、また多数の普及書等の執筆という形で、研究成果の社会還元を行ったのでAと評価した。 	<ul style="list-style-type: none"> * 各分野で非常に高いレベルの研究がなされており、来年度以降も調査活動の高い質を維持していただきたい。
3 展示活動	B	新型コロナウイルス感染症拡大により総入館者数や特別展観覧車数は大幅に減少したが、そのなかで安全安心な展示観覧環境を整備するとともに、内容・方法ともに意欲的な特別展・企画展を実施することができた。	A	<ul style="list-style-type: none"> * コロナ禍の中で総入館者数や特別展観覧者数は評価できない(評価対象外とする)が、対策を講じて、可能な範囲で受け入れたことは評価できる。 * 冬の特別展については、コロナ禍による影響で観覧者数が当初の見込みより少なかったことは止むをえない。他施設とも協力して、展示方法や照明を工夫し、展示解説の多言語化を実施するなど意欲的に取り組んだことが、アンケート結果にもみられるように、観覧者の満足度を高めることにつながったことは高く評価できる。 * 春の特別展については、コロナ禍の中でも安心して観覧できる展示手法を考案・実施したこと、また博物館の重要な任務を前面に示して、市民の関心を高めたこと、コロナ禍の中でも入館者数が見込みよりかなり多かったことから、高く評価した。収蔵庫シリーズは第2弾・第3弾を期待したい。 * 企画展等においても、博物館の収蔵資料をとおして地域の歴史や文化を掘り起こし、市民のシビックプライド醸成にもつながる展示を行った。特に「福田屋と小倉銘菓『鶴の子』」は、北九州ゆかりの老舗や文化人とのつながりを改めて知る有効な機会となった。また、最新の研究成果を速やかに紹介したことは高く評価できる。 * 総合的には、新型コロナウイルス感染症拡大の中で総入館者数や観覧者数についての評価はできないが、安全・安心な展示観覧環境を整備して意欲的な特別展・企画展を実施しておりAと評価した。 	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大が終息すれば、さらに意欲的な展示を拝見できると期待している。 * 展示解説の多言語化は、来館者が安心して内容を理解しやすくなり今のニーズに合っていると思う。 * 小学校3年生の社会科学習支援で新たな展示ガイドを作成したことは、児童・担任にとって学習内容の理解を深めるのに直結しており、とてもよいと思う。
4 教育普及活動	—	新型コロナウイルス感染症拡大により、特に教育普及活動には大きな制約があったため、評価の対象外とした。	—	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大の影響を直接受けており、評価対象外とする。 	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大が終息すれば、調査研究活動の成果に基づく教育普及活動が再び展開されると期待している。 * ギガスクール構想のもと児童生徒が端末機器を一人1台利用できるようなことを踏まえ、教育委員会を通して教員と博物館利用の検討を行ってほしい。 * 令和3年1月に出された中央教育審議会『「令和の日本型教育」の構築を目指して』を踏まえ、博物館として分野横断型探求学習への対応を検討する必要がある。 * セカンドスクール事業は継続してほしい。

5 広報・情報発信活動	B	新型コロナウイルス感染症拡大のなかで、春・夏・秋の特別展が開催できないなかで、前年度比8割近い実績があった。	B	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で臨時休館や特別展の中止が余儀なくされる中でも、積極的な広報活動を工夫継続しており、その成果が報道等で取り上げられる件数の減少を最小限に留めることにつながっていることがうかがえる。またSNSの活用など、新たな広報活動の取り組みも続けている。 * ホームページアクセス数は、特に閉館中も含めYouTubeによる各種配信など意欲的に取り組んだことが高く評価できる。 * 総合的には、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下でも様々な工夫をして、広報活動を実施しており、Bと評価した。 	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大が終息すれば、さらなる情報発信が見込めると思う。 * 可能であれば報道機関への広報に加え、ケーブルテレビや地方局で博物館の展示品や博物館の取り組み、学芸員の研究活動を深く紹介する特番(できれば1時間以上の番組として)等を企画し、放映するなど検討していただければと思う。 * コロナ禍でも様々なメディアを工夫、活用し「博物館とつなげる」取り組みを続けたことは素晴らしいと思う。 特に「うちでいのちのたび博物館」や「博物館からの挑戦状」などの情報提供活動は有効な手段であったと思う。 * 博物館ホームページにある学校向けワークシート「博物館の見学について」は使いやすいのもっとアピールした方がよい。 * YouTubeなどでの発信は子どもから大人まで楽しめ次の来館につながると感じた。学芸員は自分の専門分野の面白さを伝えてほしい。 * 音声メディアは今後重要と考えられ、ラジオの放送実績が倍になっているのは素晴らしい。
6 市民との協働	B	コロナ禍によって活動が制限されることが大きく、評価不能な項目もあるが、可能な限りで活動を無事に実施した。また今後に向けた活動の再検討を行い、今後に繋げた。	B	<ul style="list-style-type: none"> * 認定不能や評価対象外とならなかった評価指標も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた。そのような状況下で、今後に向けて活動の再検討を行い、アフターコロナにつながる準備の年とすることができたので、各評価指標についても、総合的にもBと評価した。 	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大が終息すれば、市民との協働が再び活性化すると思う。 * コロナ禍でボランティア活動は難しいが、紙芝居のYouTube配信などのオンライン用コンテンツの制作に協力いただくことも考えられる。
7 社会貢献	B	他機関の依頼に応じて、様々な形で広く社会貢献を行うことができた。	B	<ul style="list-style-type: none"> * 委員等就任件数については、前年より36%も増えた。北九州市や福岡県の委員のみならず、環境省や国土交通省、日本学術振興会の委員や、各種学会など学術研究団体の役員なども引き受けて、学芸員の経験や知見の蓄積をもとに、大きな社会貢献をしたので高く評価できる。 * 外部機関の依頼による講演などの対応回数については、コロナ禍にありながら昨年からはほとんど減っていない。 * 資料貸出については、件数は昨年より5割以上増えたが、点数は半減している。全体として前年度同等とみなすことができる。 * 総合的にも社会貢献はBと評価した。 	<ul style="list-style-type: none"> * 今後も知の集積施設として、さらに社会貢献の実績を広げていただくことを期待したい。
8 その他 (新型コロナウイルス感染症拡大防止対策)	A	新型コロナウイルス感染症拡大のなかで、ワーキンググループを設置して詳細な検討を行い、安全・安心な来館・観覧環境を整えることができた。	A	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大と状況の度々の変化の中で、来館者の安全・安心を確保し、適切な感染防止策をシステム化し、組織的な対応を徹底して講じた結果、市民からも安全・安心な博物館であることが認知されたと考えられ、高く評価できるので、総合的にもAと評価した。 	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大への対策に大きな労力と多大な時間を割いたと拝察する。今後、新たな感染症が流行しても慌てずに対策が取れると思う。 * 今後も安全・安心な来館・観覧環境を工夫・継続していただくとともに、より多くの市民が安心して来館でき、所有する多くの展示資料等の観覧や様々な体験ができることを期待する。 * 当博物館での取り組みを先進事例として博物館界で共有してほしい。 * 入館時の手指消毒やウェブ予約など館内での感染防止対策についてホームページ上にわかりやすく掲示した方がよい。
総合評価	B	新型コロナウイルス感染症拡大に大きな影響を受けて、様々な点で活動が縮小し、定量的な実績も減少した。そのようななかで、来館・観覧の制度や環境を整備し、安全・安心を第一に展示活動などを再開することができた。また展示や情報発信などで新たな工夫や取り組みも見られ、博物館活動の拡充につながる可能性を追求することができた。	B	<ul style="list-style-type: none"> * 新型コロナウイルス感染症拡大に大きな影響を受けたが、博物館活動の基礎である調査研究が盤石であることが示された。加えて、さまざまな制約の下で他の活動にも意欲的な取り組みが見られ、研究成果の社会への知的還元がなされている。 * 感染症対策によって制約を受け、博物館等の集客施設の閉館が世の中での関心となる中で、ウェブ予約等のシステムも構築され、安心して来館しやすいものとなり、その徹底した対策は各種媒体でも広報された。個々の展覧会では、当館らしさを発揮するようなバリエーションに富んだものが工夫され、研究実績についても、科研費の新規獲得も一定数得ており、公表・出版された成果も過年を超える、あるいは匹敵する結果を出している。 * 新型コロナウイルス感染症拡大による影響はあったものの、コロナ禍を機に安全・安心な開館を可能とする組織的な取り組みがなされ、展示環境の再整備がすすめられた点は素晴らしい。特別展や企画展も充実している。 	<ul style="list-style-type: none"> * 博物館活動の根幹はゆるぎないので、新型コロナウイルス感染症拡大が終息すれば、おのずと研究成果の普及や市民との協働も問題無く発展してゆくと思う。 * アフターコロナを見据えた教育普及活動の工夫・充実、例えば博物館と学校が連携したオンライン授業や、館内での体験型授業、教職員研修会等の実施・充実などが一層推進されることを期待する。 * 北九州ミュージアムパーク創造事業は、国の補助金を活用した規模の大きい事業であり、自己評価や外部評価の対象とした方がよいと考える。 * 北九州市民や北九州市に貢献する活動について、外部評価の項目に組み込んでいくとよいと思う。

評価基準 A: 大変良い、B: 概ね良い、C: やや不十分、D: 不十分